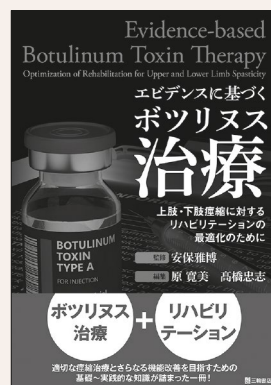


書評

エビデンスに基づくボツリヌス治療 上肢・下肢痙縮に対するリハビリ テーションの最適化のために

安保雅博(監修)
原 寛美, 高橋忠志(編集)

B5判・256頁
定価5,280円(本体4,800円+税10%)
三輪書店刊, 2022年



[評者] 松田雅弘 順天堂大学

脳卒中に代表される中枢神経疾患発症後の上肢・下肢の痙縮に対するボツリヌス治療の保険適用は2010年10月に承認され、今は痙縮の治療には欠かせない薬剤である。多くのガイドラインやレビューに、ボツリヌス治療による痙縮の軽減、関節可動域の拡大、歩行能力・ADLの改善の報告がみられる。特に、「脳卒中治療ガイドライン2021」には「脳卒中後の上下肢痙縮を軽減させるために、ボツリヌス毒素療法を行うことが勧められる」(グレードA)として紹介されている。しかし、ボツリヌス治療の機序をよく知らずに痙縮の臨床症状に役立つことを理解しているだけでは、医師による痙縮の治療手段としての理解で終わってしまう。

この書籍は、痙縮の病態理解から関節拘縮や痛みのメカニズム、ボツリヌス治療の医学的基礎に加えて、併用されるリハビリテーション技術、理学療法・作業療法、介護負担軽減まで多岐にわたり収載されている。これはボツリヌス治療にあたる医師だけでなく、専門職全員が知っていてほしい

知識であるという編集の先生方の意図が明確な書籍である。しかも、今回は医師とセラピストの共同作業という点も注目すべきである。

ボツリヌス治療による痙縮の軽減は関節の動きの改善に大きく関与する。しかし、痙縮によって生じる筋を含めた軟部組織の短縮や変性・変形(拘縮)の改善には、薬剤の施注だけでなく、リハビリテーションの持続的な実施が必ず必要となる。拡大した関節可動域を維持するために筋の伸張(ストレッチ)が重要となるが、それだけでは軟部組織にしかアプローチしていない。施注後の動きの変化に応じて、リハビリテーションでは適切な運動学習の推進や、筋の線維化に対する筋機能の改善も考慮するべきである。さらに、動きの変化による上下肢の装具の修正など、日常的に使用している補装具を含めた総合的なマネジメントが必要となる。また、反復投与とリハビリテーションの継続による機能改善の効果も重要な点であり、継続的な治療計画とリハビリテーションにこそ、効果を最大限

に引き出すコツがある。そのため、ボツリヌス治療は単純な痙縮の改善のみを目標とするにとどまらず、日常的な困りごとに対して目標設定をどのようにすべきかチームで考えておく必要がある。

痙縮治療のマネジメントとして「痙縮管理は複雑な病態であるため、患者・家族と協力して多職種からなるチーム医療を提供する必要がある」と述べられている。ボツリヌス治療の効果を最大限に生かし、対象者の生活を豊かにするため、医師、専門職、家族をチームとした目標設定や評価とともに、施注後のリハビリテーション、生活を含め、医療と介護の枠を越えた総合的な治療プランのカンファレンスを事前に行うことが必要不可欠である。私たちはチームとなって、対象者の抱えているつらさに加え、その介護者の大変さも聞き取り、対象者の生き生きとした生活を創造、デザインしていく包括的で患者立脚型の治療プランを皆で共有して、ボツリヌス治療を展開していきたい。それこそがリハビリテーションの核心であり、本書はそれが詰まった書籍である。